

『大和本草』「民生日用」出典攷

郭 崇

A Study on the Source of “Minshengriyong” in *Yamatohonzō*

GUO Chong

摘要

贝原益轩（一六三〇—一七一四）为了创立日本的本草学，以“民生日用”为目的，一生致力于本草学的实践和资料搜集，一七〇九年八〇岁时集大成的本草学著作《大和本草》十六卷及附录二卷得以刊行。

在《大和本草》中，“民生日用”思想构成其中核贯穿其中。所谓“民生日用”即对民众的日常生活有益的“有用之学”。通过对《大和本草》出刊前“民生日用”的用例进行调查发现，最早用例可以追溯到朱子的《四书章句集注》之《大学章句序》。

本论在详细分析《大和本草》中“民生日用”用例和出典的基础上，结合益轩“民生日用”思想的出典论考察，试图阐明其“民生日用”思想主要源于朱子学。

キーワード

大和本草 有用の学 民生日用 知のネットワーク 朱子学

はじめに

貝原益軒（寛永七〈一六三〇〉-正徳四〈一七一四〉）は、日本独自の本草学を樹立すべく、「民生日用」を目的とした本草学の実践と資料蒐集に生涯を捧げ、これを大成して宝永六年（一七〇九）八〇歳の時、『大和本草』十六卷、附録二卷を刊行した。『大和本草』における本草学の基幹である「植物」の部分では、まず食生活で欠かせない「穀」類、次に「穀」類の補充である「菜」類、更に健康を保つ「薬」類を紹介しており、これらは人間の命と関わる部分である。その次に配列されるのは益軒は独自に立てた「民用」類である。益軒の生活での大切さによって配列される基準から『大和本草』における「民用」類の重要性が窺えるであろう。「民用」類に収録される項目は主に民衆の衣と住と関わる品物であり、「民用」とは一般の庶民が日常生活で使って、現生活に役立つという意味である。

山中芳和氏は「泰平の世に生きた益軒が、晩年において教訓的著作の執筆を自らの使命として果たそうとしたのは、彼がその生涯を通して拠り所としてきた学問観「有用の学」に促されたものである。学問が有用の学であるには、実践性と実用性を欠いてはならない」と指摘されるように、易しく実践できる現生活に役立つような「有用の学」への重視は、益軒の学問の特質である¹⁾。

益軒はこの「有用の学」をさらに発展し、『大和本草』には「民生日用」の学問観まで提出した。「民生日用」の用例は、益軒の著作の中では『大和本草』に集中し、益軒以前では宋・朱熹に遡る。益軒の「有用の学」の結晶である『大和本草』に見られる「民生日用」の用例を詳細に分析し、その内実と貝原益軒の「民生日用」の思想の核となる出典を明らかにすることを目的とする。

一、貝原益軒と「有用の学」

貝原益軒の高弟である竹田定直は、益軒の墓誌銘の中でその性格を次のように語られる²⁾。

恭黙道ヲ思ヒ、精ヲ極メ微ニ造ル。物ヲ愛スルヲ務トナシ、天ニ事ヘテ欺カズ。韜藏シテ増顕ハレ、謙遜シテ愈輝ク。遺訓策ヲ存シ、後学永ク依ル。

（恭黙して道を思い、精を極めて微に造り、物を愛するを務めとなし、天に事えて欺かず。韜藏して増顕はれ、謙遜して愈々輝く。遺訓策を存じ、後学永く依る。）

益軒の楽天的で明朗温和で庶民的な親しみやすい性格が窺える。このような性格があつてこそ、こつこつと生涯の蓄積で、晩年「有用の学」という学問観が結実した。「通計五〇〇種」と井上忠氏が統計したように、益軒は生涯広範囲にわたって膨大な著作群を残した³⁾。ジャンルでいえば、経学（『大疑録』や『慎思録』など）、地誌・紀行（『筑前国続風土記』、『京城勝覧』など）、歴史（『黒田家譜』や『筑前国諸社縁記』など）、本草（『花譜』や『菜譜』や『大和本草』など）、啓蒙的訓書（『益軒十訓』『神祇訓』など）、字書・事典類（『点例』『日本釈名』など）、幅広くわたっている。

七〇歳以後、益軒の著作活動は通俗書や教訓書に傾く傾向がある。広く世に益となることによって、多様な教訓本をはじめとする著作群が生み出された。次の辻本雅史氏の説によると、これは益軒の漢文著作『大学新疏』出版の挫折で新しい学問の方向性を見出すからである⁴⁾。

益軒は「唯だ国字の小文字の、衆庶と童穉とに助け有る者を作為して、以後輩を待たんと欲するのみ。庶幾くは民生日用に小補有らん。」と漢文に無縁の一般大衆や初学者のための平易な啓蒙書を著述した。出版メディアを通じての教育活動といってもよい。出版メディアを活用した通俗書著述によって直接一般大衆に関わろうとするのは同時代の儒学者の通念から外れた。

辻本雅史氏が指摘されるように、『益軒十訓』は、益軒が「みずからの儒学思想にもとづいて実際の生活上の規範を多方面にわたってやさしく実践的に説いている」ものであり、「観念的な記述ではなく、技術的で実践的な方法を具体的に説くことに主眼がおかれている」のである。和訓による教訓的

な著作において、益軒は教育の問題を方法の問題として具体的に展開しようとしたのであるが、それは、益軒には「有用の学」を目指す志向があると指摘される⁵⁾。

ほかには、秋山和夫氏は益軒の学問観について、その実学的な性格と「有用の学」の関連性から次のように述べた⁶⁾。

益軒の学問は、たんに、「詞章に溺れ、訓詁に泥み、記誦に止る」ことを考えず、知識は実践を導くためのものであり、逆に知識は実践によって確固たるものになると考えた。「知行並進の工夫」（『慎思録』）を強調し、「知行の二者、車の両輪の如し」（同書）として、この両者の関係を重視した。知ることが実践の端緒であるとする益軒は、学問の順序として、「日用彝倫の平実切実なるものを以てするを先と為す」（同書）とし、学問をするのは「将に以て用を済さんとするなり。故に学は必ず事に施して而して後に有用の学と為るべし」（同書）として、学問の実践生を強調するのである。「大言して高妙を説く」だけの学問を「無用の学」として退けたのである。

一般に儒学は実践躬行を目指すものであるが、それは五常五倫の実践に関するものである。益軒は儒学者としてももちろん五倫の実践を説くのであるが、さらに「民用の質」となり、「民用の助け」となる学問の実用性を強調するのである。

益軒自身も「有用の学」について、正徳四年（一七一四）に刊行された主著の『慎思録』では、次のように強調している⁷⁾。

凡為_レ学_ヲ焉^ハ者将_ニ以_レ済_レ用^ト、故学必施_ニ於_レ事^ニ而後可_レ為_ニ有用_ノ学^ト。其曰_ニ有用_ノ学^ト何_ゾ也、曰是明^ニ人倫_ニ施_ニ事業^ニ、修_レ己治_レ人之学也。

（凡そ学を為すは、将に以て用を済んとす。故に学は必ず事に施し而る後に有用の学と為るべし。其の有用の学と曰ふ何ぞなり、曰く是れ人倫を明らかにして事業に施し、己を修めて人を治するの学なり。）

即ち、益軒の目指す「有用の学」は、その成立の前提が事に施して用を済

んとすことであり、具体的に言えば、「有用の学」とは人倫を明らかにして事業に施し、己を修めて人を治す学問である。

そして、「益軒十訓」の一つである『文訓』にも、益軒は「有益の書」が「民用の助」となるべきだと次のように述べている⁸⁾。

ぬかみそ、ひしほの製法をしるせる書を民用の助とならば、有益の書也。

もし宋儒におもねりへつらひて雷同し、発明する事なく、同じ事はば、高く道德性命を談ずとも無用の学なるべし。

このような見地からみれば、益軒は「有用の学」をただたんに道徳的実践の学にとどめないで、日常生活に対する有用性を獲得するための学問として位置づけたのである。学問は人間生活にとってきわめて必要なものとなり、したがって、益軒はこのような「有用の学」を人々の間に広く普及させることを自分の使命としている。

さらに、『慎思録』では、「民生に助け有れば、方技の小道を執りて世儒の非議を受くと雖も、亦た辞せざるところ。」と明示するように、益軒は民生の為に、世間の非議をうけてもかまわないという自覚を持っている⁹⁾。

以上のように、益軒の学問には志向されたのは「有用の学」である。この「有用の学」を誰のために作ったのであろうか。

秋山和夫氏は益軒の学問の対象について、次のような指摘がある¹⁰⁾。

益軒は学問を必要とする人々の対象を漢字の読める一部の階層に止めないで、多くのひとびとに押し広げようとしたのである。「世の不幸にして、漢字を知らざる人の爲に、いささかむかし聞ける所のことはりを今の俗語を以てかきあつめ」（『大和俗訓』自序）て書いたのが『大和俗訓』をはじめとする「益軒十訓」である。

これらの著述には『文訓』の序文で竹田定直が述べているように、「ひたすら民俗児童の曉りやすく、日用の質となるべき事を、俗語にて述作し給ふ」ているのである。

『大和本草』でも、初学の人を学問の対象とすることを次のように述べる¹¹⁾。

初_レ學之士、以_レ此_ヲ爲_セハ_下造_ルニ_二精博_ニ之階梯_ト上、則亦庶_ニ乎有_ニレ_小ニ_二補于物理之學之萬_一ニ_二而已矣。

(初學の士、此を以て精博に造るの階梯と爲せば、則ち亦物理の学の萬一に小補有るに庶きのみ。)

専門の本草書を作るのではなく、初学の人のために『大和本草』を作ったのである。初心者向けの本なので、わかりやすくために益軒はその文体の面でも次のように工夫した。

不_メ用_ニ漢字_ヲ而書_クニ_レ之_ヲ以_ルニ_二國字_ヲ者_ハ予_カ之衰拙不_レ善_セニ_二文詞_一恐_下不_メ能_ニ爲_サニ_二文理_ヲ而觀_ル者却難_{カラ}ニ_二甲_一理_一會_シ欲_レ使_{ント}ニ_二人_ヲ易_{カラ}ニ_レ曉_シ也

(漢字を用みずして之を書くに国字を以てするは、予が衰拙にして文詞を善くせず。能く文理を為さずして、観る者却って理会し難からんを恐る。人をして曉し易からんと欲するなり。)

『慎思録』でも国字を使った故について、次のように述べている¹²⁾。

朱子_ノ曰、平生自知_ニ無用_ヲ、唯欲_スニ_二修_ニ茸_{シテ}小文字_ヲ以_待ニ_二甲_一後世_ヲ上庶_ヲニ_レ有_レ小_ニ補于天地之間_ニ。篤信意謂是先賢_ノ之事業固_ニ後人之所_レ不_レ可_レ及也。

(朱子の曰く、「平生自ら無用を知り、唯だ小文字を修茸して以て後世を待たんと欲す。天地の間に小補有ると庶らん。」と。篤信意謂へらく是れ先賢の事業にして、固に後人の及ぶべからざる所なり。)

唯欲_丙スル_作ニ_二為_{シテ}国字之小文字之有_レ助_ニ于衆庶_ト與_ニニ_二童稚_者ヲ_上以_待ニ_二甲_一後輩_ヲ而已。庶幾有_小ニ_二補于民生日用_ニ云_{コト}爾。

(唯だ国字の小文字の衆庶と童稚とに助かる有る者を作して以て後輩を待とんと欲するのみ。庶幾くは民生日用に小補有らんと云うことのみ。)

程子_ノ曰、閑_ニ過_ニ了_ニ日月_ヲ、即是_レ天地_ノ間_ノ一_ノ蠹也。惟_レ有_補ニ_二輯_ニ聖人遺書_ヲ庶_ニ幾有_ニレ_補耳。愚謂前修尚憂_ルコト_ニ閑過_ヲ如_レ此_ノ。況吾輩愚昧、虚_{シテ}生_ヲ終_レ身_ヲ不_レ能_ニ奈何_トモスル_{コト}、無_レ所_レ逃_レ罪_ヲ。雖_レ讀_ニ聖人

之遺書ヲ、不_レ能_二躬行_{コト}、不肖亦不_レ足_レ言_ニ。況補^フ聖人^ノ之遺書ヲ、是_レ賢者之事、愚者誠_ニ不_レ可_二做_シ得_一、唯欲^ス編録^{シテ}於_二国字^ノ小文字^ヲ以_レ曉^{ント}中^ニ不_レ識^ラ漢字^ヲ人及小兒輩^ヲ庶_二幾乎有_ニ小_二補_一民用_ニ而已矣。

（程子の曰く、「閑やかに日月を過ぎしる、即ち是れ天地の間の一蠹なり。惟だ聖人の遺書を補輯すること有るは、補ふこと有るに庶幾きのみ。」愚謂らく前修尚ほ閑過を憂ふること此くの如し。況んや吾輩愚昧、生を虚して身を終ゆること奈何ともすること能はず、罪を逃がる所無し。聖人の遺書を読むと雖も、躬行すること能はず、不肖亦言ふに足らず。況んや聖人の遺書を補ふは、是れ賢者の事、愚者誠に做し得るべからず。唯だ国字の小文字を編録して以て漢字を知らざる人及び小兒輩を曉かんと欲す。民用に小補有るを庶幾ふ。）

漢文ではなく、国字を使って文を作るのは衆庶と童稚にわかりやすい学問を作るため、益軒の「有用の学」は専門の学者より漢字の知らない一般の民衆や子供たちを対象としている。民用にすこしでも役立てるのを願っている。

さらに、『大和本草』では、『大和本草』を含んで数多くの啓蒙書のような著作の編纂意図を次のように明示した。

是^ヲ以_レ自_二始_一衰_一以_レ来_二以_一國^ノ字^ノ拙^ノ語^ヲ著_シ小^ノ文字^ノ數^ノ種^ヲ欲_レ曉^{ント}郷^ノ里^ノ之^ノ民^ノ俗^ト與^テ兒^ノ輩^ノ庶_二幾乎有_ニ小_二補_一民^ノ生日^ノ用^ノ之^ノ萬^一而已_一今^ニ作^ラ大^ノ和^ノ本^ノ草^ヲ其^ノ意^亦然^ニ焉

（是を以て始衰より以来、国字の拙語を以て小文字數種を著す。郷里の民俗と兒輩とを曉らかにせんと欲す。民生日用の万一に小補あるに庶幾ふのみ。今『大和本草』を作る。其の意、亦然り。）

このように、益軒は「有用の学」を目指して国字を使って数多くの啓蒙書のような著作を著し、いろんなジャンルに及んでいるが、その学問の根底には、共通する学問の方法が貫いている。

秋山和夫氏は益軒の学問の方法について次のように指摘された¹³⁾。

益軒は学問の方法として、中庸の文章を引用して次のように述べている。「博く学び、審に問ひ、慎んで思ひ、明らかに辨へ、篤く行ふ。是道をしりて行ふの工夫にして、学問の法なり」(『大和俗訓』卷一)として博く学ぶことを学問の要諦の一つとしている。さらに、「博く学ぶの道は、見ると聞くとの二つをつとむ、聖賢の書を読み、人に道をききて、古今を考へて、道理を求むるなり」(同上)として学問することをたんに書物を読むことにのみ止めないで、見聞を広めることをもその重要な要件としたのである。自己の経験にてらして道理を求めるといった学問の方法が、本草学、地理学に向かわしめたのであろう。

益軒の「いわゆる利学論は、学問と真剣にとりくんでいった学説の系譜としてではなしに、体験のなかから経験的に出てきたものと思います」(松田道雄『現代に益軒を読む意味』)という、松田道雄の指摘は、益軒の学問の方法をよく表現している。益軒の教育論もその例外ではない。

『大和俗訓』卷一には、その学問の方法を次のように述べる¹⁴⁾。

学問の方法は知行の二を要とす。こまかにわかつては五あり。中庸に曰、博く学び、審に問ひ、慎んで思ひ、明らかに辨へ、篤く行ふ。是道をしりて行ふの工夫にして、学問の法なり。(中略)博く学ぶの道は、見ると聞くとの二つをつとむ、聖賢の書を読み、人に道をききて、古今を考へて道理を求むるなり。

益軒は『大和本草』卷一「論本草書」にも、その実学の研究方法を次のように述べる¹⁵⁾。

凡爲^ル此學^ヲ人ハ博^ク學^テ該^ク洽^ク多^ク聞^ク見^テ闕^ク疑^ヲ殆^ヲ彼^レ是^ヲ參^ル考^スシ是非ヲ分辨スル事精詳ナラスンハ不^レ可^レ得^ル的^ニ實^{ナル}ヲ^レ偏^ニ以^テ所^ヲ自己^ノ聞見^{スル}爲^レ是^ト以^テ人^ノ異^ヲ己^ノ爲^メ非^ト固^ク執^リ錯^リ認^ムヘカラス大^ニ凡^ク聞^テ見^テ寡^ク陋^{ナル}ト妄^ニ聞^テ見^テ信^{スル}ト偏^ニ執^ル己^ノ說^ヲト輕^ク率^ニ決定^{スル}ト此四^ノ者^ハ必^ズ誤^リアリ

(凡そ此の學を爲る人は、博學該洽にして、多く聞き多く見て、疑殆を闕く。彼是を參考し是非を分辨する事、精詳ならざれば的實なることを

得るべからず。偏に自己の聞見する所を以て是と爲し、人の己に異を以て非と爲し、固く執り錯り認むべからず。大凡聞見寡陋なると、妄に聞見を信ずると、偏に己か説を執ると、輕率に決定すると、此の四つの者は、必ず誤りある。）

益軒は「聞見の寡陋」、「聞見の盲信」、「自説の固執」、「輕卒な判断」といった四つを戒め、「博学洽聞」「盲信せず存疑」「分辨是非」「精詳の実」の四要を強調した。

さらに、『大和本草』「論本草書」には、益軒は「広覽強記」と「審問精思」の重要性を次のように強調する。¹⁶⁾

凡博物之學非^レ有^ラ廣^ク覽^シ強^ク記^ス之^ヲ識^シ以^テ通^シ洽^シ於^テ古^ノ今^ニ審^ミ問^ヒ精^ク思^フ之^ノ勞^ヲ以^テ考^ヘ驗^ス衆^ノ物^ヲ則^チ不^レ能^ク究^ム其^ノ品^ノ物^ヲ通^シ其^ノ性^理考^ヘ其^ノ是^非正^シ其^ノ註^誤分^キ其^ノ眞^偽辨^ヘ其^ノ同^異而^テ極^メ廣^ク博^ク致^ス精密^ヲ

（凡そ博物の學、廣覽強記の識、以て古今に通洽し、審問精思の勞、以て衆物を考驗すること有んば、則ち其の品物を究め、其の性理に通じ、其の是非を考へ、其の註誤を正し、其の眞偽を分ち、其の同異を辨へて廣博を極め精密を致すること能はず。）

何故本草學は博学洽聞が必要なのか。益軒は『大和本草』「自序」で次のように述べる。¹⁷⁾

六^ノ合^ノ内^ニ所^レ産^ス之^ノ品^ノ物^ヲ浩^ク穰^ニ不^レ可^ク究^ム盡^ス矣^ト其^ノ爲^ニ民^ノ用^ト者亦^レ弘^ク多^ク無^ク垠^ヲ矣^ト然^レ則^チ學^者明^ニ知^ル於^テ庶^ノ物^ノ之^ノ功^モ亦^レ豈^シ可^ク不^レ廣^ク博^クナ^ラ乎^ト古^ノ人^ノ有^リ謂^フ「宇^ノ宙^ノ内^ノ事^ヲ皆^ク吾^ノ儒^ノ分^内ノ^事ト^シ」蓋^シ經^ヲ以^テ載^セ道^ヲ史^ヲ以^テ記^ス事^ヲ其^ノ次^ニ集^ル物^ノ之^ノ書^亦不^レ可^ク無^ク是^レ本^ノ艸^ノ暨^シ諸^ノ載^籍之^ノ所^ニ以^テ不^レ可^ク闕^也

（六合の内産する所の品物、浩穰にして究め尽くべからず。其の民用と為す者も亦弘多にして限り無し。然らば則ち學者明らかに庶物を知るの功も亦豈広博ならざるべけんや。古人に謂ふこと有り、「宇宙の内的事、皆吾が儒の分内の事」と。蓋し、經以て道を載せ、史以て事を記す。其

の次、物を集むるの書も亦無かるべからず。是本草暨び諸載籍、之以て闕くべからざる所なり。）

八本清治氏は『大和本草』について高く評価し、そして益軒の本草学の方法を「民生日用」、「博・精への重視」、「懷疑精神」と次のようにまとめる。¹⁸⁾

『大和本草』は益軒の実学思想が生んだ最大の成果である。その成果は、益軒の学問姿勢に負うところ大であろう。それは、本草学を「民生日用に切なり」と位置づけていること、「広博を窮め精密を致す」として博とともに精を重視したこと、「妄に（自己の）聞見を信ずること」も否定する懷疑精神、などに端的に示されているが、いずれも益軒の本草学研究を支えた方法といえる。

このように、益軒は実践しながら有用の学を目指す学問観が形成した。この実用を重んじる学問について、同時代の伴高蹊は次のように評価した。¹⁹⁾

もとより愛人済物をもて要とせる故に、其著所の書多く平仮名に記して、通俗のため教ること丁寧反復す。養生、初学の諸訓、大和俗訓などは尚さもありなん。鄙事記のごとき、日用の細務にまでも及ぶは、近世諸儒、唯自己の学力を示して、梨棗を費すものと、相去る事天淵なるべし。

二、「民生日用」の用例と朱子学

益軒の著作群には、「実学」への強調、「有用の学」や「民用」などの表現が随所に見えるが、「民生日用」という熟語として最初に提出するのは『大和本草』の中である。この「民生日用」は益軒が独自に作ったことばであろうか、或いは何の影響を受けて提出したのか、「民生日用」の用例を結びながら検討してみる。

『大和本草』が刊行される前に出てきた「民生日用」の用例を探して、漢字文化圏の中国・日本・朝鮮の十七種類の書籍から三〇例を見つけ、つぎの表1にまとめた。

表1 『大和本草』刊行前の日・中・韓の諸書籍における「民生日用」の用例一覧

	時代	著者	著作名	用例
中国側		朱熹	『四書章句集注』之「大学章句序」	民生日用彝倫。
	一二七〇	黎靖德	『朱子語類』	民生日用最要緊事。 民生日用皆是。 民生日用而不知 → 百姓日用而不知（『易』）
	宋	魏了翁	『鶴山集』	茶之為利、不惟民生日用之所資。 稻錦、民生日用之常也。 民生日用之常、后王降德之本。
	宋末元初	陈元靓	『事林広記』前集	桑麻穀粟皆民生日用之不可闕者
	元	陳澔	『礼記集説』	飲食衣服尤民生日用之不可闕者。
	一四六八	朱見深	『御製重脩孔子廟碑』	布帛菽粟、民生日用不可暫缺。
	一四八七	丘濬	『大學衍義補』	奪民生日用之資、以為國家經費之用。 如籩豆之實、然非民生日用不可無之物。 以民生日用衣服器械之所由出也。
	一五二八	湛若水	『格物通』	以民生日用衣服器械之所由出也。
	一五九六	李時珍	『本草綱目』	民生日用而不知。 夫茶一木尔、下为民生日用之資、上为朝廷賦税之助、其利博哉。 民生日用、蹈其弊者、往往皆是
	一六三九	徐光啓	『農政全書』	茶 誠民生日用之所資、国家課利之一助也。

中国側	明末	鍾惺	『董安于』	若曰種樹者、民生日用之常也。
	明末清初	黃宗羲	『傳是樓藏書記』	先王之大經大法、兵、農、禮、樂、下至九流六藝、切於民生日用者、蕩為荒煙野草、由大人之不說學以致之也。
朝鮮側	一四四〇		『朝鮮王朝實錄』 (又『李朝實錄』) (全一四例、一五六八年迄六例)	民生日用、莫急於鹽、故古今帝王莫不以鹽利為務、今欲補義倉、無如鹽利。 此非徒使兵家足也、民生日用、不可以雙丁為一戶也。 臣非徒欲使兵家足也、民生日用、不可以雙丁為一戶也。 民生日用衣食之外、必有貨幣、以為貿遷之資。 春耕、夏耘、秋收、冬藏、民生日用作為之事、皆順天道而及其時也。 本乎人君躬行、心得之餘、而行乎民生日用彝倫之教者、本也。
日本側	一六七六	熊沢蕃山	『集義和書』(一六冊) 第二版刊	真ノ財用ト云ハ、五穀ノ多ト薪・材木・麻・綿等、民生日用ノ物ヲ云ナリ。
	一六九七	人見必大	『本朝食鑑』	斯ノ書一部ノ大意者、辨 ^ス 民生日用之食物有 ^ル 好惡。

もともと「百姓日用」という用語の使用は甚だ古く『易』の中に見える²⁰⁾。ところが、「民生日用」なる用語が見られる古い用例として、例えば南宋・朱熹(建炎四年<一一三〇>~慶元六年<一二〇〇>)撰『四書章句集注』「大学章句序」の中に「民生日用彝倫」とあるのは、管見のところ「民生日用」のもっとも古い例である²¹⁾。そのほか、南宋・黎靖徳編の『朱子語類』一四〇卷(咸淳六年(一二七〇)に成立し、朱子の没後に門人との問答を部門別に分類編集した講学語録)にも三例がある²²⁾。即ち「民生日用」の

古い用例は朱子の学問に遡れる。

貝原益軒の「民生日用」の思想は、この朱子学から何か影響を受けたのだろうか。益軒の読書歴を詳しく記録する『玩古目録』と家蔵書目録を確認したところ、益軒は『四書章句集注』と『朱子語類』を読んだことあるのが確認された²³⁾。

『玩古目録』によると、益軒は十四歳の時、経学に接触し始め、二二歳の時、朱子の著作『近思録』を読みはじめ、その影響を受けた。

『玩古目録』の最初に載せる益軒の子供時代から三五歳までの読書目録によると、『四書集註』の記録があり、さらに、寛文十一年・四二歳の条には、「朱子語類（自昔年至今秋見盡了）百四〇巻 四七冊」とある。

そして、家蔵書目録には、「賜書（五〇部）には、年代不明のうち 朱子語類 四七冊」と載せられ、架蔵の『朱子語類』があることが確認される。

益軒は経書を読むだけでなく、年譜によると、二八歳から経学の講義を始めた²⁴⁾。明暦三年（二八歳）条には、「三月二日始めて大学の序を講ず、経を講ずるの始なり。」と述べたように、二八歳の時、始めて大学の序を講ず、これは経を講ずる始めである。

寛文三年（三四歳）の春、「始めて近思録を講習し、且つ典故訓詁を考証す。日本に於て近思録を講ずるは之を始とす。」と述べるように、益軒は日本で朱子の『近思録』を講ずる最初の人だと思われる。

さらに、寛文五年（三六歳）条には、「朱陸兼用から程朱を信仰するようになった。」と、益軒は三六歳から朱陸兼用から程朱を信仰するようになった。

しかも、寛文八年（三九歳）の頃、朱文公（即ち朱子）の学術を信ずること愈々篤く、好んで其文集を読んだ。

まとめていうと、益軒は三五歳までは朱子学や陸王心学の本を数多く読んだが、三六歳以降は朱陸兼用の立場から程朱の説を信奉するようになるに及んで、朱子学に関する本に目を通すことが多くなってきた。

さらに年譜によると、寛文五年に、益軒は始めて学部通辨を読み、遂に陸

王の非を悟り、盡く旧見を棄て、全く程朱の説を信じるようになった²⁵⁾。

嘗て陸象山の学を好み、また王陽明の書を喜ぶこと已に数年、朱陸兼用の意あり。此歳（寛文五年）始めて学蔀通辨を読み、遂に陸王の非を悟り、盡く舊見を棄て、全く程朱の説を信じて純如たり。以為らく尚書論語は是れ聖人の説く所、此を以て陸王の説に比すれば、齟齬する所あり。帰向する所大に異なるを覚ゆと。是より益々濂洛閩閩（周程張朱）の正学を信じて、直に洙泗（孔子）の流れに沂らんと欲し、心を専らにし志を致し、昼夜刻苦して講学最も勤む。

そして、『先哲叢談』の「益軒の伝記」の冒頭文では、似たような記事が載せている²⁶⁾。

初め其の学、主とする所無し。陸象山・王陽明の説に於て皆取る所有り。後に『学蔀通辨』を読むに及び、壹に朱学に帰依す。

即ち、益軒は寛文五年（一六六五）三六歳の時、益軒は朱子学へ帰依した。

以上のことから、益軒の学問の形成は、朱子学からの影響が十分に考えられる。

三、『大和本草』における「民生日用」の質と出典

辞書を調べてみると、「民生日用」という表現は熟語として見つけられなくて、「民生」と「日用」とは載せられている。『日本国語大辞典』によると、「民生」が「人民の生活や生計」であり、『大漢和辞典』では「人民の生計、人民の生活」と解釈し、意味は大体同じである。「日用」について、『日本国語大辞典』では二つの意味があり、一つは「毎日使用すること。また、そのもの」という意味であり、大漢和の「毎日の用ひる。又、毎日の入用。」と近く、もう一つは「日常」と同じ意味である。

『大和本草』における「民生日用」は、どんな意味であろうか、益軒はどのような文脈で「民生日用」を使ったのであろうか。つぎは『大和本草』における「民生日用」の用例と照らして検討してみる。『大和本草』では、「民生日用」を熟語として使われるのは次の三例である。

表2 用例一：儒学者としての自覚と本草学の不可欠

『大和本草』「自序」	『陸九淵集』二二
<p>古人有_レ謂_レ「_レ宇宙_ノ内_ノ事_、皆吾_カ儒分_ノ内_ノ事_ト」。</p> <p>蓋經以載_セ道_ヲ、史以記_ス事_ヲ。其_レ次_、集_ル物_ヲ之書_、亦不_レ可_レ無_。</p> <p>是本艸暨_レ諸載籍之所_レ以不_レ可_レ闕也。且本艸之學所_レ以爲_レ切_{ナリト}乎民生日用_ニ者_、亦有_レ以_ヘ也。</p> <p>品_ノ物_ノ之良_ニ毒_ニ、誠_ニ難_ク測_リ知_ニ、衆人_ノ之用_レ捨_、亦宜_ニ慎_ニ擇_フ。不_レ但_レ多_ク識_ニ其_レ名_ヲ而_レ已_ニ也。</p> <p>然則物_ノ理_ノ之學_、其關_レ係亦不_レ可_レ爲_レ小_ト也。</p>	<p>宇宙内事、是己分内事。</p>

この「古人」は中国南宋の儒学者・陸九淵（一一三九～一一九二。陸象山ともいう）のことを指し、「宇宙中のすべての物、皆わが儒学者の分内のことである。」には明示されたように、儒学者として、物事の理を一々究明すべきである。

続いて、益軒は物を集める類書の重要性を強調する。そのうち、本草を載せる本草書も闕かせない本である。本草書に輯録される品物の質（体に良いか毒あるか）を測るのは簡単なことではなく、民衆はそれを使うか捨てるか、慎んで選択すべきである。しかし、多くの人はただ品物の名を知る程度である。従って、人の生活・命まで関わる学問であるため、本草学は重視されるべきだと主張し、一般の民衆までわかる実用的な本草書あるいは現生活に役立てる学問を作るのは益軒にとっては必要なこととなっている。物理を究明する学の視点から見れば、本草学は小となすべきではない学問である。

このように、益軒は「本草の学は民生日用に切なる学問」、即ち日常生活に役立てる学問としてその大切さを強調する。彼の執筆の意図は一般庶民の生活役立てる有用の本草学を作ることである。

表3 用例二：『大和本草』の文体と編纂意図

『大和本草』 「凡例」	『慎思録』 卷一
<p>自_レ始_レ衰_レ以_レ来、以_レ國_レ字_レ拙_レ語_レ著_シ小文字数種_ヲ、 欲_レ曉_ニ郷里之民_ノ俗_ト與_ニ兒輩_ヲ、 庶_レ幾乎有_ニ小補_ニ民生日用_ノ之萬一_ニ而已。今作_ニ大和本草_ヲ。其意亦_レ然焉。</p>	<p>朱子_ノ曰、「平生自知_ニ無用_ヲ、唯欲_ス下_ニ修_ニ葺_{シテ}小文字_ヲ以_テ待_ニ後世_ヲ上_ニ庶_レ有_ニ小補_ニ於天地之間_ニ。」篤信意謂是先賢_ノ之事業固_ニ後人之所_レ不_レ可及也。(中略)</p> <p>惟綴_ニ輯_{シテ}小文字_ノ之随_テ分_ニ易_{キレ}做_シ者_ヲ以_テ惠_ム兒輩_ニ。 是_レ庶幾_ハ有_ニ補_ニ於萬一_ニ。</p>

用例二には、『大和本草』の文体と編纂意図について述べられた。

「是を以て始衰より以来、国字の拙語を以て小文字数種を著し」と述べるように、益軒は五〇代から国字で何種類の本を著した。続いて、郷里の民俗を兒輩にもわかるようにさせたくて、一般民衆の日常生活に少しでも役立てばと切に願い望んでいるため、『大和本草』を作ったという編纂意図が述べられた。

『大和本草』で使われる漢字片仮名交じりの文体について、「凡例」ではさらに次のように強調された。「漢字を用ゐずして之を書くに国字を以てするは、予が衰拙にして文詞を善くせず。能く文理を為さずして、観る者却って理会し難からんを恐る。人をして曉し易からんと欲するなっている。」と、其の理由を明示しました。これは朱子からの影響があるかもしれない。

益軒の思想の集大成と思われる『慎思録』には、その出典が覗える²⁷⁾。

「朱子曰く、『平生自ら無用を知り、唯だ小文字を修葺して以て後世を待たんと欲す。天地の間に小補有ると庶らん』」と示したように、朱子は少しでも何か役立つため、分かりやすい本を作ったという学問に向かう姿勢が覗え

た。

益軒は朱子の影響を受けたうえで、自分も小文字でわかりやすい本を編輯して兒輩に恵むという編纂意図を明示したのである。

表4 用例三：「民生日用」を実現する至近の道

『大和本草』「凡例」	『孟子』「尽心章句上」
孟子ノ曰、「親 ^{シテ} 親 ^ヲ 而仁 ^{スレ} 民 ^ヲ 。仁 ^{シテ} 民 ^ヲ 而愛 ^{スレ} 物 ^ヲ 。」 是愛 ^レ 育 ^レ 之序 ^テ 也。故 ^ニ 愛 ^レ 育 ^レ 之 ^レ 道、以 ^レ 厚 ^{スル} ヲ ^ニ 人倫 ^ヲ 爲 ^レ 先 ^ト 。然 ^{レハ} 則 ^シ 仁 ^シ 民 ^ヲ 濟 ^{スレ} 人 ^ノ 之 ^レ 功、人 ^ノ 人 ^各 所 ^レ 當 ^キ 行 ^ハ 、此 ^レ 乃 ^シ 民 ^ノ 生 ^レ 日 ^ノ 用 ^ニ 至 ^ル 近 ^キ 之 ^レ 事、不 ^レ 可 ^レ 忽 ^{ニス} 。	「親親而仁民、仁民而愛物。」

用例三では、益軒は孟子の説「親を親して民を仁す。民を仁して物を愛す」を引用して、孟子がいうには、「親を親して人を優しく対応する。人を優しく対応して物を愛する。」とあり、益軒からみればこれは愛育の糸口である。人を優しく対応してものを愛することは、人の責任である。これは民衆の生活と深く関わり、日常生活では重視すべきことである。民を仁し、人に役立つことは「民生日用」を実現するきわめて近い道だと指摘した。

以上のように、『大和本草』における「民生日用」とは「民衆・庶民の日常生活に利あること、直ちに役立つこと」という意味で、三つの用例からみれば、益軒の「民生日用」の思想は儒学、特に朱子学からの影響が大きくて、その核となる出典は朱子学にあると考えられる。

注

- 1) 山中芳和「貝原益軒における「民生日用」に質する学問と教育論の展開—格物窮理の工夫と有用の学—」(一) (岡山大学教育学部研究集録第一三六号、二〇〇七年、一二三—一三四頁)。
- 2) 竹田定直書いた益軒の墓誌銘、伴高蹊撰『近世畸人伝』に収録される。東洋文庫

- 二〇二（平凡社、昭和四七年〈一九七二〉一月、二三～二五頁）。
- 3) 井上忠撰『篤信編輯著述目録』（資料叢書『益軒資料』七「補遺」に収録、九州資料刊行会、一九六一年）。
 - 4) 辻本雅史「貝原益軒と出版メダイア―『大学新疏』編纂と出版の努力」（衣笠安喜編『近世思想史研究の現在』、思文閣出版、平成七年（一九九五）四月、八七～一〇六頁）。
 - 5) 『日本思想史辞典』（子安宣邦監修、ベリカン社、二〇〇一年）所収の「益軒十訓」に関する記述、辻本雅史執筆、同書四七頁）「益軒十訓」は、明治二六年（一八九三）に、西田敬止氏により益軒著作の十三の教訓書の中から修身用の書として十を集めて公刊したものである。内訳は、『家訓』『君子訓』『大和俗訓』『楽訓』『和俗童子訓』『五常訓』『家道訓』『養生訓』『文武訓』『初学訓』である。そのうち、『家訓』は益軒五八歳の時に著したが、他は全部七四歳以降の著作である。これについては、井上忠氏は「益軒の円熟した学風と豊富な人生体験」に基づいてこのような数多くの「大衆教訓書」を書かせるに至ったと指摘される（井上忠『貝原益軒』吉川弘文館、一九六三年、二四三頁）。
 - 6) 秋山和夫『日本の教育思想』「益軒」（福村出版、一九七九年）。
 - 7) 貝原益軒撰『慎思録』（『益軒全集』巻之二、国書刊行会、昭和四八年、巻之一、五頁）。
 - 8) 『文訓』下之末（『益軒全集』巻之三、同上、三五八頁）。
 - 9) 前掲注7）、（巻六「自己編」、一四六頁）。
 - 10) 前掲注6）。
 - 11) 貝原益軒撰『大和本草』（『大和本草』の引用は国立国会図書館蔵（白井氏蔵書、特一―二四六四）宝永六年（一七〇九）皇都書林・永田調兵衛版本に拠る。「自序」、〇二オ～〇二ウ）。
 - 12) 『慎思録』貝原益軒（寛永七〈一六三〇〉～正徳四〈一七一四〉）著、6巻。正徳四（一七一四）年成立。『慎思録』巻之六（『益軒全集』二、一四五―一四六頁）。
 - 13) 前掲注6）。
 - 14) 貝原益軒撰『大和俗訓』（『益軒全集』巻之三、国書刊行会、昭和四八年、五六頁）。
 - 15) 前掲注11）、巻一「論本草書」、二九オ）。

- 16) 前掲注11)、三一オ。
- 17) 前掲注11)、「自序」、〇一オ。
- 18) 八本清治「経験的実学の展開」（『儒学・国学・洋学』《日本の近世》第十三卷、中央公論社、一九九三年七月）。
- 19) 『近世崎人伝』東洋文庫二〇二（平凡社、昭和四七年〈一九七二〉一月、二三—二五頁）。
- 20) 「民生日用而不知」、『易』繫辭上「一陰一陽之謂道。統之者善也、成之者性也。仁者見之謂之仁、知者見之謂之知、百姓日用而不知。故君子之道鮮矣」と述べ、朱子はこのに基づいて「民生日用」を作ったと考えられる。
- 21) 南宋・朱熹（建炎四年〈一一三〇〉～慶元六年〈一二〇〇〉）撰『四書章句集注』「大学章句序」（『儒藏』精華編一一〇、北京大學出版社、二〇〇八年一二月、十一頁）、新釈漢文大系第二巻『大学・中庸』「大学章句序」（明治書院、昭和四三年一月、一一〇頁）参看。
- 22) 宋・黎清徳編、王星賢點校『朱子語類』二、巻第一六「大学三・傳十章釈治国平天下」（中華書局、三六九頁）、和刻本『朱子語類大全』七、巻第一六「大学三・傳十章釈治国平天下」（宋・黎清徳編、中文出版社、一九七三年六月、五七頁）；『朱子語類』五、巻第七五「易十一・上繫下」（一九二七～一九二八頁）；『朱子語類』七、巻第一一四「朱子十一・訓門人二」（二七五五頁）、和刻本『朱子語類大全』七、巻第一一四「朱子十一・訓門人二」（五七一—五七一二頁）、『朱子語類』訳注、巻一一四（汲古書院、平成二四年七月）。
- 23) 『玩古目録』と『家蔵書目録』（九州史料叢書『益軒資料』七 補遺、九州史料刊行会、一九六一年一二月）。
- 24) 益軒年譜、益軒会編『益軒全集』（国書刊行会、一九七三年五月）巻一の「益軒年譜・益軒先生伝」による。巻一に載せた年譜と著述年表は、主として貝原好古、梶川久撰するところの益軒先生年譜に據り、傍ら先生の日志雜記を参考して作る物である。他には、「貝原益軒伝・略年譜・遺事略」（五弓 豊太郎『事実文編』第二巻（国書刊行会、一九一〇—一九一一年）も参考した。
- 25) 前掲注24)、『益軒全集』巻一「益軒年譜・益軒先生伝」の寛文五年（一六六五）条。
- 26) 「益軒の伝記」（原念斎著『先哲叢談』、文化十三年（一八一六）刊）。

郭 崇「『大和本草』「民生日用」出典攷」

- 27) 貝原益軒撰『慎思録』（『益軒全集』卷之二、国書刊行会、昭和四八年、卷六「自己編」、一四六頁）。